こだま新聞

第193号
平成23年11月

義歯と高齢化

11月1日(火)にNHKの「暮らしの最新事情」という番組で「高齢化で入れ歯が変わる」

という報道がなされました。

番組案内を見ると「総入れ歯になってから20年以上たつと、入れ歯を支える歯ぐきが

無くなって・・・」

そんなことはありません。歯ぐきは歯を支える部分のことを指します。歯を失うと、歯を支えていた部分の骨は吸収しますが数ヶ月で安定して、その後は時間とともに吸収することはありません。実際に義歯を使っている人で毎年

義歯を新しくする人はいます。義歯を定期的に検診するのは痩せたアゴを足すためではなく、具合が悪いところがないか確認する目的です。アゴに傷があるのに我慢して使った取り扱いをして破損しているのを治療しています。加

今月の行事

11月

7日 休診(11月6日、7日と

気仙沼市に支援ボランティアに行きます)

17日 中学校講演「歯肉炎」

齢でアゴが痩せていくのではありませぬ。誤解を与える報道で残念です。

健康コラム 輝きの処方せん〈40〉

秋田魁新報発行 機関紙「MARI MARI」に9月23日に掲載

ハートインクリニック院長 佐々木康雄先生

潟上市大久保

一浦城(うらじょう)へのお誘い ～ 古城址と癒し ～

夏草や兵どもが夢の跡…栄華を誇った奥州平泉の藤原氏と義経の哀れな末路を、松尾芭蕉は杜甫の詩「国破れて山河あり、城春にして草木深し」に想(おも)いを重ねて詠んだといわれる。平家物語をはじめ、栄枯盛衰の歴史はロマンに満ちている。

八郎潟町高岳山の隣に標高175mの古城址「浦城」がある。鎌倉幕府開府に貢献した三浦一族は紆余曲折を経て三浦半島から浦城に移り住んだが、1590年ごろ秋田安東の内紛に巻き込まれ落城した。NPO法人浦城の歴史を伝える会は、この杉林に見張台や防柵、鐘撞堂をこつこつ建造し、轡がへんぼんとひるがえる古城址に整備した。駐車場から本丸へ20分は格好の散歩道。歴史ロマンを楽しむ方、寡黙な遠来の客も少なくない。

長野まゆみの小説「野川」に次のような教師の科白(せりふ)がある。「意識しろ。顔のこの辺に目があるつもりでいる。そうすれば自分がよく見える」。現実に生きている自分と、それを高みから見守るもう一人の自分を、意識的に二分しておく。高みは頭の上でも近くの里山でもいい。こんな心がけで人は冷静になれる。

浦城の背後には白神と森吉山を見はるかす霽靄(うっそう)たる山々、振り返ると日本海側に男鹿半島と広大な八郎潟干拓地、眼下に馬場目川。そして来し方行く方につながる2本の道、奥羽本線と国道が視界を横切る。人里からほどよい距離と眺望、兵どもの息吹が残る古城址のたたずまいは恰好の癒やし空間だ。

昔からナントカと煙は高い所を好むという。何となく始まった我が人生もいつか煙となって空高く消えてゆく。風になっていつまでもその辺をぶらぶらしているより、存命中に身近なパワースポット浦城で足腰を鍛えたい。皆さんもどうぞ!